

今回は、今までになく長編作品にすぐれたものが多かったこと、そしてこのコンクールでは一番下の学年である中学一年生の健闘が目立ったことが印象的でした。

そうした中、最優秀作品に選ばれたのは、最年長である高校三年生の作者で、その年代にふさわしい作品だったと思います。主人公は大学受験を控えた高校三年生。塾のトップクラスにぎりぎりに入ったものの、ついていくのが必死でやや疎外感を感じているという設定ですが、言わばごくごく普通の女子高生です。その彼女がちょっと他の子と違うのが、“馴染み”の隠れ家的な喫茶店を持っていること、そこの店主の「おばちゃん」との何気ないやり取りも含めて、ここでの時間が彼女の今を支えている状況がとてもよく伝わってきます。その隠れ家にある日“侵入”してきた塾のトップの女の子。それは主人公にとっては危機になりかねないできごとでしたが、逆にこのことを機に、二人は友だちになっていきます。そんな主人公の微妙な自意識を象徴しているのが、タイトルになっている「翼」、そしてその具体物として現れる「羽」で、この使い方の巧みさが、この作品を「文学」に高めていると思いました。

優秀賞となった「ジンジャー」は、うまさという点では、文句のつけようがない作品でした。作品世界がいかにもテレビドラマ的、言いかえればいささか作りものめいているという意見もありましたが、実感のようなものは後からついてくればいいので、ここまでのドラマを仕上げた作者に拍手を送りたいと思いました。特に印象的だったシーンは、後段で父親からの電話で話される「宝探し」の件。父親の心情、父と娘との絆と距離感が凝縮された見事なエピソードでした。あえて難点をいえば、その父と娘のドラマの濃さに比べて、若い部長との恋愛談がいささか薄っぺらかった点でしょうか。ただ、これもこちらにあまりリアリティがあると、作品の焦点がかえって結びにくくなったかも知れませんが……。

奨励賞の中では、「本の虫、本の間人」が印象に残りました。これは「ジンジャー」とは対照的な持ち味の作品で、作品の構成という点からはかなりバランスが悪い面もあるのですが、中学一年という「子ども」から脱却しようとしている時期の登場人物たちそれぞれの心の風景を、「本」との関わりで展開させている意欲作で、作者の可能性を感じました。ただ、この作品に関して言えば、やはり登場人物が多すぎ、せめて四人くらいを中心にして整理すれば、ぐっと作品の焦点が絞りこまれると思いました。

わたしたちが文章で「創作」することの意味はいくつかあると思いますが、ここまで述べた三作品は、その創作することの意味をそれぞれに代表しているようなタイプの違う作品で、その点でもとても楽しめた選考でした。